

# 英語深層文型の一試案(Ⅱ)

## —文主語の型—

村田忠男

### 1. 第二部への序論

本稿の第一部は、梅光女学院大学英米文学会発行『英米文学研究』「第10号」(1974年11月)に発表した。そこでは、従来の文型分類が表層構造にのみ着目してなされてきたことを指摘し、ついで、変形文法研究の成果を応用しつつ新しい「深層文型」を単文型 (Simplex Sentence Pattern) に限り提案した。

この第二部からは複文型 (Complex Sentence Pattern) を取り扱っていくことになるが、第一部で仮定した通り、複文型とは、recursive S を含んだ文型のことである。勿論、埋め込まれる文の数は理論上無限であるけれども、最初の embedded S が生起する場所には制限がある。従って、この最初の embedded S が現われる文の種類も自と限界があり、文型分類は可能なはずである。<sup>(1)</sup>

従来行われてきた文型は、Onions に基づく五文型にしる、Hornby などの動詞型にしる、いずれも、述語動詞を中心にした分類であり、述部に関しては、たとえ表層構造から行われたにせよ、ある程度、分析されていたけれども、主部の特性が論じられることは殆んどなかったといってよい。これは、複文に関する文型研究があまり組織的に行われなかったことにもよるが、<sup>(2)</sup> 深層文型研究の第二部となる本稿では、主部に補文のある文にのみ考察を限定して、述語動詞と文主語を関連づけながら、文法的特性、及びさまざまな変形規則に対する反応に基づいてAからGまでの7種類に Complex Sentence Pattern 1 (C1) を下位区分していきたい。

以下、本稿で扱う C 1 A から C 1 G までの代表例を一つずつあげておこ

う。

- (C1A) That she solved the problem is significant.
- (C1B) That he will accomplish even more is likely.
- (C1C) That Bernie ran away from the bear was wise.
- (C1D) For his wife to accept this view would be tough for John.
- (C1E) For us to have a solution will suffice.
- (C1F) It happened that the counselor ignored poor students.
- (C1G) The counselor began to ignore poor students.

## 2. Factive Predicate 類と Non-Factive Predicate 類

Kiparsky and Kiparsky (1971) が提案した factive predicate と non-factive predicate の区別は、現在でも有効であると考えられる。それぞれ次のような述語を代表としてあげておく。

- (1) Factive predicates: significant, odd, tragic, sad, crazy, exciting, relevant, instructive, well-known, clear; matter, count, make sense, suffice, amuse, bother, fascinate,.....
- (2) Non-factive predicates: likely, sure, possible, true, seem, appear, happen, chance, turn out,...

これらの述語を用いる文は、深層構造で、主語の位置に補文を埋め込むことができる。

- (3) [That she solved the problem] is significant.
- (4) [That he will accomplish even more] is likely.

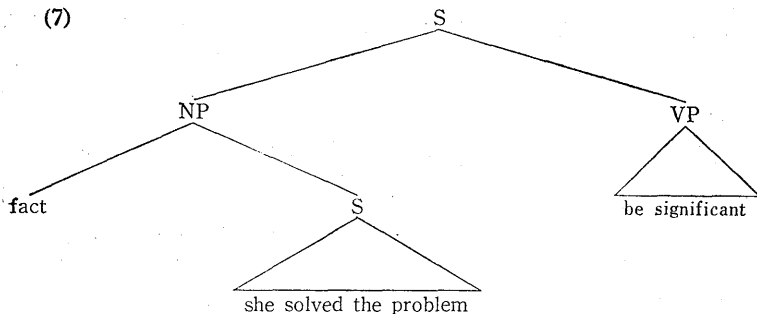
表面的には、(3) (4)を区別することは、不可能であるが、幾つかの統語テストを行なっていくと、その反応は一樣でないことが判明する。

まず第一に、文主語の前に同格名詞句の 'the fact' をつけて、意味的に不自然でないのは(3)だけである。

- (5) The fact that she solved the problem is significant.
- (6) \*The fact that he will accomplish even more is likely.

つまり factive predicate を使う補文の命題は真であることを、話者が前提としているのに対し、non-factive predicate を使う補文の内容は、話者が、単に真実性を主張しているのみであって、真であることを前提としている

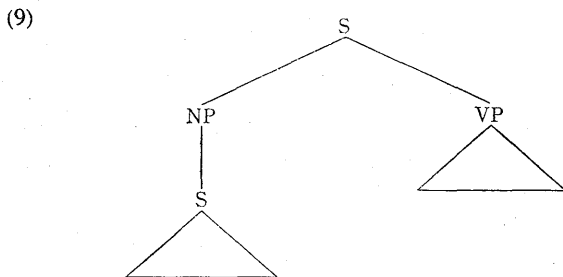
のではないということである。Kiparsky and Kiparskyはこの相違を深層構造に反映させようとして(3)と(5)に対する深層構造を次のように提案した。<sup>(3)</sup>



しかしながら、この考え方は言語事実を十分に反映したものとは言い難い。補文の命題が真であることを前提としている述語でありながら 'the fact' と共起できないものが沢山あるからである。

(8) \*The fact that the boy helped the girl was wise/kind/foolish/polite.

そこで、本稿の「深層文型」設定にあたっては、(3)と(4)はどちらも(9)のような構造を有していたと仮定する。実は、(9)は本稿で扱うC1全体の深層文型を表わす図ともなるものであることを指摘しておきたい。<sup>(4)</sup>



(3)と(4)は、Complex Sentence Pattern 1 (C1)の中でさらに下位分類する際には、(5)と(6)にあらわれた相違の他に、次に述べるようなテストでも異なった反応を示すので、それぞれ C1A (factive 補文を

とる文型), C1B (non-factive 補文をとる文型) の例として区別したい。

(10) (The fact of) her having solved the problem is significant.

(11) \*(The fact of) his accomplishing even more is likely.

(10), (11) を比較すると, factive 補文は, 動名詞構文になることもできるのに対し, non-factive 補文では不可能である。さらに, 'the fact of' を付加しても文法性は変っていない。

(5) (6) と, この (10) (11) は, いずれも述語の "factivity" を試すものである。次に, (3) (4) に Extraposition 変形をかけてみると, どちらも文法的な文になる。

(12) It is significant [that she solved the problem].

(13) It is likely [that he will accomplish even more].

Kiparsky and Kiparsky (1971) は, non-factive 補文については, Extraposition が義務的であり, factive 補文については随意的であると述べているが, この観察は正確とはいえない。

(13) のもととなっている (4) も, たいていの native speaker は認めてくれるようであるし, 次のような例も報告されている。

(14) [That she was out for a touch] was certain.

*What happened is* [that negroes want to be treated like men].<sup>(5)</sup>  
(Kajita, 1968, p. 28)

ただし 'likely' や 'certain' などは non-factive predicate の中でも, むしろ例外的なものであり, たいていの場合, Extraposition が義務的であることは事実である。次の a, b を比較されたい。

(15) a. \*[That he will accomplish even more] seems to me.

b. It seems to me [that he will accomplish even more].

(16) a. \*[That I am wrong] appears.

b. It appears [that I am wrong].

随意的である 'likely' や 'certain' のような場合でも, Extraposition 変形適用後の文の方が, より自然であるという事実からも, この変形操作が, C1A と C1B の分類テストとして, 多少は有効であるといえよう。

次に, It-replacement 変形は non-factive 補文にしか適用できない。

---

(17) \*She is significant to solve the problem.

(18) He is likely to accomplish even more.

しかし、このテストにも次のような例外はある。

(19) \*He is possible to accomplish even more.

しかしながら It-replacement は、(20) で示すように、factive 補文には決して適用されないので、分類テストの一つには加えてよいだろう。

(20) \*He is relevant to accomplish even more.

\*He is tragic to be found guilty.

Extraposition テストと It-replacement テストに加えて、Kiparsky 夫妻が提案したものに、Negative-Raising テストがある。彼らの観察によれば、補文中の否定語句を外に取り出す Negative-Raising 変形は、factive 補文には適用できない。次を比較されたい。

(21) a. It is odd that Tom hasn't lifted a finger.

b. \*It isn't odd that Tom has lifted a finger.

(22) a. It's likely that he won't lift a finger until it's too late.

b. It's not likely that he will lift a finger until it's too late.

しかし、Cushing (1972) によれば、Negative-Raising が可能なのは、non-factive predicate の中でも [-stance] の意味泰性を持つものだけであり、こうした predicate をとる文の主語の態度は消極的なものであって、その補文の真偽値は “indefinite” である。逆に、“definite” な真偽値を持つ補文には、Negative-Raising はかからないということになり、non-factive predicate にも [+stance] を持つ動詞があると報告されている。Cushing の観察は正しいように思われるので、Kiparsky 夫妻の提案は分類テストとして充分でないといえよう。

Wilkinson (1970) は、factive 対 non-factive の区別に役立つのは、むしろ “Indefinite Incorporation” 規則であると述べている。次を比較されたい。

(23) \*It wasn't significant that any of the policemen had ever harmed him.

(24) It isn't likely that Henry ever threw anyone out of the pool.

‘ever’ のような語は negative polarity idiom と呼ばれ、否定語句と必ず共起するものであり、‘any’ もそうである。non-factive 補文の場合のみ、補文の外にある否定語句と negative polarity idiom は関係づけられるというのが、Wilkinson の主張であるが、このテストの方が Negative-Raising より C1A と C1B の区別には、より正確であるといって差し支えないようである。

(25) c は Extraposition, It-replacement, Negative-Raising, Indefinite Incorporation の適用を全て受けた C1B の典型的な例で、概略 a, b, c の順序で派生されると考えられる。<sup>(6)</sup>

- (25) a. \*That John couldn't encourage Bill to speak to *anyone* seemed.  
 b. It seemed That John couldn't encourage Bill to speak to *anyone*.  
 c. John couldn't seem to encourage Bill to speak to *anyone*.

non-factive 補文にだけ見られる現象をもう一つあげておきたい。Emonds (1970. p.16) が non-factive parenthetical と呼んでいる次のような挿入句は、C1B にだけ見られる。

- (26) John will buy any dress,  $\left\{ \begin{array}{l} \text{it seems to me} \\ \text{it is true} \end{array} \right\}$ , which he thinks Mary likes.

Emonds は (27) のイタリック体の部分を前置する Non-factive preposing 変形が適用されて (26) が派生されると考えている。<sup>(7)</sup>

- (27)  $\left\{ \begin{array}{l} \text{It seems to me} \\ \text{It is true} \end{array} \right\}$  (that) *John will buy any dress* which he thinks Mary likes.

C1A では (28) でわかるようにこのような挿入節は作れないので、本稿でのテストに利用できる。

- (28) \*John will buy any dress,  $\left\{ \begin{array}{l} \text{it is odd} \\ \text{it bothers me} \end{array} \right\}$ , which he thinks Mary likes.

以上の考察より、Kiparsky and Kiparsky (1971) の提案は多少の問題点を含んでいたが、factive 対 non-factive predicate の区別に関しては、現

在でも有効であると考えてよいであろう。本稿での C1A と C1B の分類に関しても、以上で一応確立されたと考えたい。

最後に、C1A の例と類似しながら内部構造の異なる文をあげておく。

(29) His rapid drawing of the picture fascinated me.

この 'drawing' は伝統文法的説明だと次の文中の 'drawing' と同じく動名詞ということになる。

(30) His drawing the picture rapidly fascinated me.

しかし、(29) と (30) は意味が異なっていて、(29) は、「彼が、すばやく絵を描くその描き方が私を魅了した」であるのに対し、(30) は、「彼がすばやく絵を描いたという事実が私を魅了した」となる。この相違は既に Lees (1960, p. 64) が指摘していたが、彼の分析では変形の相異で説明しているのに対し、Wasow and Roeper (1972) は、(29) と (30) は異なる深層構造から派生されたもので、(29) の 'drawing' を nominal gerund. (30) の 'drawing' を verbal gerund と呼んでいる。つまり、(29) の主部は、S が動名詞化の変形を受けた結果ではなく、もともと内部構造が NP で PS rule で直接導出されるのに対し、(30) の主部は S に支配されていると考えている。<sup>8)</sup> 従って (30) は C1A の例であるが、(29) は私の分類では S7 の例となる。

nominal gerund であることの証拠として、形容詞の修飾語がつきうること、直接目的語の前に of が入ることの他に、定冠詞がつきうる (e.g., *The rapid drawing of the picture*), 複数形になれる (e.g., *Sightings of UFO's*), 否定要素は no である (e.g., *no acting*), 時制を示せないなどが指摘されている。(29) と (30) を簡単にして次の (31) のようにすると、今述べたようなテスト法では、どちらか不明であるが、'His drawing' の部分は 'the way he drew' と 'the fact that he drew' の二通りの解釈が可能となり、(31) には (32) a. b. どちらも続けることができる。

(31) His drawing fascinated me.

(32) a. ...because he always did it lefthanded.

b. ...because I didn't know he could be persuaded so easily.

(Lees, 1960, p. 64)

(32) a が続けられる場合は (29) と同じ nominal gerund であるが、  
 (32) b が続けられる場合は (30) と同じ verbal gerund ということになり、  
 その場合、(31) は C1A の例となる。<sup>(9)</sup>

### 3. Class W adjective 類

Wilkinson (1970) が Class W adjective と呼ぶ形容詞類は全て主語の位置に補文をとることができる。安井稔編 (1974 a) の補注 (p. 164) にそれらのかかなり包括的なリストが掲載してあるが、その一部を引用しておこう。

(33) Class W adjectives: wise, smart, kind, brave, rash, foolish, cowardly, absurd, clever, fair, excellent, impolite, intelligent, mad, merciless, moderate, thoughtful, unwise,...

こういった形容詞を述部とし、主語に補文のある例をあげよう。

(34) [That Bernie ran away from the bear] was wise (of him).  
 [For Bernie to run away from the bear] was wise (of him).  
 [Bernie's running away from the bear] was wise.

(34) の例からわかるように、Class W adjective はどの Complementizer とも共起しうるので、前節で述べた “factivity” とは一見、関連がなさそうであるが、次を比較されたい。

(35) [That Bernie ran away from the bear] was wise.  
 (36) [That Bernie ran away from the bear] was not wise.

(35) の補文の命題が常に真であるという前提を持っていることは、否定文にした (36) の補文もそうであることから明らかである。これらは (33) の他の形容詞と交換しても同様であるから、(33) は補文に factivity を要求するグループであることがわかる。従って、幾つかの変形に対しても factive predicate と同じ反応を示す場合がある。

まず、Extraposition は、factive 補文と同様に随意的である。

(37) It was wise of Bernie [(for him) to run away from the bear.]  
 It was wise [for Bernie to run away from the bear.]

次に、(22), (23) で示した Wilkinson の提案による Indefinite Incor-



poration も、factive 補文と同じく適用することはできない。

- (38) \*It wasn't kind of Henry [to ever throw anyone out of the pool.]  
\*It wasn't smart of you to have ever lifted a finger to help anybody.

以上の点では、factive predicate と Class W adjective は全く同じ行動を示すけれども、補文の前に同格名詞句の 'the fact' を付加すると、Class W adjective を用いる文は非文法的になってしまう。

- (39) \*The fact that the boy helped the girl was wise/kind/smart.

さらに、factive 補文には決して適用されない It-replacement が Class W adjective のとる補文には全て適用されるのである。

- (40) Bernie was wise to run away from the bear.  
Alex was wise to roll the hose back onto the dock.

また、(41) のように factive 補文は、その中に 'resemble' のような [+stative] の動詞をとることができるが、(42) のように Class W adjective をとる補文の中では、状態動詞が使用できない。

- (41) It's sad [that the man resembles an ape.]  
(42) \*It was clever/kind/stupid [to resemble his horse].

以上の考察より、C1A、C1B に続いて、Class W adjective が文主語をとる文の集合を C1C とすることにしたい。C1C は、補文の命題が真であることを前提とする点で factive を示すにもかかわらず、(39) (40) (42) で行なったテストは、factive predicate を使用する C1A とは全く特性が異なることを示すのに充分である。

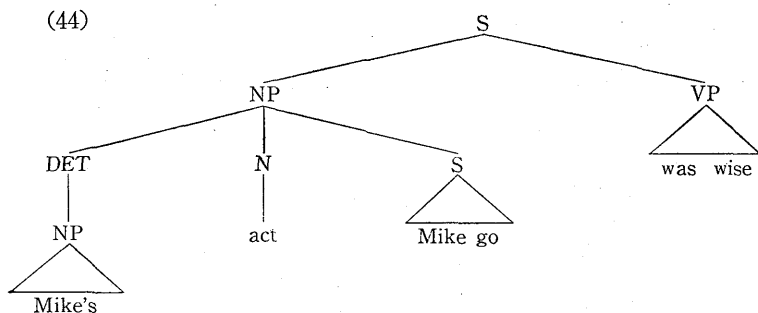
この節では Wilkinson (1970) の使用した言語資料を利用したけれども、彼の議論や提案そのものには賛成しているわけではないことを明らかにしておきたい。彼は、Kiparsky and Kiparsky (1971) の、'fact' を深層構造で補文の前に導入するという分析方法を援用している。

- (43) a. For Mike to go was wise.  
b. For Mike to go was wise of him.  
c. Mike was wise to go.  
d. Mike was wise in going.

e. Wisely, Mike went.

f. Mike did wisely  $\left\{ \begin{array}{l} \text{to go} \\ \text{in going} \end{array} \right\}$ .

従って (43) のような文は、全て (44) を深層構造とするものと仮定している。



しかしながら、'act' のような具体的な語を導入するのは、次のように、それ以外の語でも矛盾はないため、act のみを選ぶ根拠が示されないことになってしまう。

(45) The  $\left\{ \begin{array}{l} \text{act} \\ \text{action} \\ \text{deed} \end{array} \right\}$  of Mike's going was wise.

従って、本稿では C1C は (9) と同じ構造をもつことを主張し、(43) については、a. b. c. のみ同一の深層構造から派生されると考えたい。

#### 4. Double-for Predicate 類

C1D に含まれる文は次のようなものとする。

- (46) a. [For his wife to accept this view] would be tough for John.  
 b. It would be tough for John [for his wife to accept this view].  
 c. [For Dupont to solve that problem] would be a bitch for GE.  
 d. It would be a bitch for GE [for Dupont to solve that problem].

b と d は、a と c に Extraposition を適用して得られたものであるが、

このように for NP を二個付けることの可能な述語は次のようなものである。<sup>18</sup>

- (47) Double-for predicates: tough, pleasant, difficult, hard, easy, intolerable, (im) proper, (un) important, (im) possible, (un) necessary, painful, delightful, dangerous, simple, unhealthy, stimulating, boring, (un) interesting, entertaining, amusing, gratifying; pleasure, waste of time, snap, breeze, bitch, delight, joy, gas, pain in the ass, pain in the neck,...

実は (47) のような述語は従来 tough-predicate と呼ばれ, Tough-movement 変形を許すものと考えられてきた。しかし, (46) の b. d. に適用すると次のように非文法的となる。

- (48) a. \*This view would be though for John for his wife to accept.  
b. \*That problem is a bitch for GE for Dupont to solve.

(48) の非文法性を説明するのに, Shiseki (1975) は, Chomsky (1973) の PRO-Replacement を採用し, 補文の目的語が主文に移動されないのは, 目的語が補文の for NP の NP の位置 (Chomsky の PRO の位置) にまず移動されるため, Chomsky の Subject Phrase Condition によって, その次に適用されるべき It-replacement がかからなくなるからだと解釈している。しかしながら後述する理由によって (46) と (48) は別々の深層構造をもった文であると考えた方がよいので, 移動変形に関する制限を考慮する必要はないと思われる。

Tough-movement の改訂案として出された Chomsky の PRO-Replacement は, (49) を (50) にする変形である。

- (49) It is pleasant for the rich [sCOMP PRO to do the hard work].  
(50) It is pleasant for the rich [sCOMP the hard work to do].

(50) に It-replacement が適用されて最終的には従来 of Tough-movement と同じ結果を派生する。

- (51) The hard work is pleasant for the rich to do.

この Chomsky の提案は, 目的語が主語の位置にくる不自然な中間構造 (50) の妥当性が充分に証明されない限り, あまり納得のいくものではな

い。もし、仮りに、PRO-Replacement が正しいとしても、(49) と (51) を変形で結びつけてしまうことには問題がある。

(49) から (51) を派生するのが、Tough-movement 変形であるが、この変形には沢山の問題が含まれていることが最近指摘されている。C1D には (51) のような例を含めないということを明確に示す必要があるため、従来提出されてきた Tough-movement 賛成派の証拠をふり返ってみて、それらが不十分であることを指摘したい。

Postal and Ross (1971) は (52) のような文は、Tough-movement が存在すると仮定しなければ、'getting herself arrested on purpose' の主語が Equi NP deletion によって消去されることを説明できないといっている。

(52) [Getting herself arrested on purpose] is hard for me [to imagine Betsy being willing to consider].

しかし、Akmajian (1972) は、(52) のような構造では、Tough-movement が適用されたと考えなくとも、いずれにしろこのような Equi NP deletion は必要だと述べており、(53) のような証拠文をあげている。

(53) [Getting herself arrested on purpose] is { too crazy  
just crazy enough }  
for me to imagine Betsy willing to consider (it).

文末の 'it' に ( ) がついていることに注意されたい。(53) の主部が 'consider' のうしろから移動されたと考えより、むしろ 'it' の存在が示すように、主語 NP によって 'consider' の目的語が消去されたか、または、代名詞化されたと考えることも可能である。もしそうだとすれば (52) は Tough-movement の存在を証明するとはいえないわけである。

Berman (1973) も Tough-movement の存在を信じて、この変形に関する制限を研究しているが、しかし彼のあげている証拠は次のようなものである。

(54) Headway should be easy to make in cases like this. (p.34)

'headway' という語は単独では決して使用されず 'make headway' のようなイディオムとしてのみ現われるので、(54) の 'headway' も 'make' のうしろから移動されたと考えざるをえないと主張している。しかしながら

Lasnik and Fiengo (1974) はこれに反論して、(55) のように Passive では切り離し可能なイディオムでも、(56) (57) のようにはできないことを示した。

- (55) a. Someone took advantage of Mary.  
b. Advantage was taken of Mary.  
(56) \*Advantage was easy to take of Mary.  
(57) \*The advantage that we took of Mary was frowned upon.

ところが (54) の例は (58) のように関係詞節化することが可能なので、'headway' の例は代表的ではないと論じている。

- (58) The headway that we made was sufficient.

Postal and Ross の (52) も、Berman の (54) も、Tough-movement 存在の証拠とはなりえないことがわかったが、Lasnik and Fiengo (1974) は、その他にも反証をあげていて、次のようなものは、かなり強い Tough-movement 反対の証拠といえるだろう。

- (59) a. \*To please John is being easy.  
b. \*It is being easy to please John.  
c. John is being easy to please.  
(60) a. \*John tries to please  $\begin{Bmatrix} \text{John} \\ \text{him} \end{Bmatrix}$  to be easy.  
b. \*John tries it to be easy to please  $\begin{Bmatrix} \text{John} \\ \text{him} \end{Bmatrix}$ .  
c. John tries to be easy to please.  
(61) a. \*To please John is intentionally easy.  
b. \*It is intentionally easy to please John.  
c. John is intentionally easy to please.

Tough-movement は随意的規則であるため、(59)~(61) の c のみ文法的にし、a. b の派生が阻止されるためには、ad hoc な制限が必要である。

- (62) Be easy to please.

これは命令文なので、省略された主語は 'you' であるが、Tough-movement 適用前の主語は 'to please you' であったことになり、命令文をつくることは不可能なはずである。さらに、(63) b は (63) a から Tough-movement されたと考えると、a の must は「～にちがいない」という意

味しくないのに、b の *must* は「～にちがいない」と「～ねばならぬ」の二通りの解釈が可能である。

- (63) a. It must be easy to please John.  
b. John must be easy to please.

実際、(63) a, b は別々の深層構造から派生されたと考える方が自然である。

(46)a をもう一度次に掲げるが、それは (64)b にパラフレーズすることができる。

- (64) a. For his wife to accept this view would be tough for John.  
b. For his wife to accept this view would be tough *on* John.

ところが、次の (65) a は (65) b のようにパラフレーズされる。

- (65) a. That view is tough for John to accept.  
b. In John's case, that view can be accepted only with difficulty.

Lasnik and Fiengo (1974, p.560) は (64)a のような文は “effect of a state of affairs or situation on an entity” をあらわし、その文中の ‘tough’ は実在物が影響を受けるその受け方を表現しているのに対し、(65) a のような文は、 “an entity in terms of action on or change of state of that entity” をあらわし、その文中の ‘tough’ は action を描写しているのであって、(64)a と (65)a の ‘tough’ は意味も異なり、それぞれ別の深層構造から派生されると主張している。(65)a は深層構造に於て ‘that view’ を主語とし、 ‘to accept that view’ の部分が Complement Object Delection によって ‘to accept’ だけになると考えられている。この変形が妥当なものであるかどうかは現在のところ不明であるが、少なくとも (65) a のような文は、C1D の例でないということが明らかになったと言える。

##### 5. Emotive Predicate 類と Non-Emotive Predicate 類

C1E は (66) のような文を含み、C1F は (67) のような文を含むものとする。

- (66) a. [That we have a solution] will suffice.  
 b. [For us to have a solution] will suffice.  
 c. It will suffice [that we have a solution].  
 d. It will suffice [for us to have a solution].  
 e. It is natural [for poor immigrants to do the hard work].
- (67) a. It happened [that the counselor ignored poor students].  
 b. It seems [that John hates Mary].

C1E に使用される述語は次のようなものである。

- (68) Emotive predicates: natural, important, odd, surprising, interesting, crazy, relevant, instructive, sad; suffice, bother, alarm, fascinate,...

これらは補文主語に for つけることができる点で C1D に使用した (47) の Double-for predicate と類似しているが、しかし、(68) の場合には (69) でわかるように、述語に直接 for NP を付加することはできない。

- (69) \*[For us to have a solution] will suffice for John.  
 \*It will suffice for John [for us to have a solution].  
 \*It is natural for the rich [for poor immigrants to do the hard work].

(68) のように補文主語に for をとりうる述語は Kiparsky 夫妻によって Emotive predicate と呼ばれ、これらは “the subjective value of a proposition rather than knowledge about it or its truth value” をあらわす。<sup>(11)</sup> これに対して (70) に示すような述語は、(71) で示すように補文主語に for をとることができないもので、Non-emotive predicate と呼ばれ、C1F に使用するものである。

- (70) Non-emotive predicate: well-known, clear, likely, probable; turn out, seem, appear, happen, chance, prove,.....<sup>(12)</sup>
- (71) \*It happened for the counselor to ignore poor students.  
 \*It seems for John to hate Mary.  
 \*It is well-known for him to teach Latin.

さらに次の (72) と (73) を比較されたい。

- (72) a. \*We will suffice to have a solution.

- (73) b. \*Poor immigrants are natural to do the hard work.  
 a. The counselor happened to ignore poor students.  
 b. John seems to hate Mary.

これらは (66) d, e, (67) a, b, に It-replacement を適用した結果であるが, (72) a, b. の派生が阻止されているのは, 補文主語に for がついているため, Chomsky の Subject Phrase Condition が適用されるからだと Shiseki (1975) は考えている。C1E と C1F の区別には, この It-replacement がテストとして利用できるけれども, Shiseki の提案は必ずしも充分に有効であるとは言い難い。Class W adjective を使用する C1C の例, (43) と (40) の一部をもう一度, 次に示そう。

- (74) a. [For Bernie to run away from the bear] was wise.  
 b. Bernie was wise to run away from the bear.

(74) a のように, Class W adjective の補文主語も for をとることができるにもかかわらず, It-replacement を適用した (74) b は文法的である。Subject Phrase Condition は正しい文まで阻止してしまうことになり, 彼の提案の反例となることを指摘しておきたい。

問題は C1C にも C1F にも It-replacement が正しく適用されることであるが, 次のような点で区別が可能である。C1C の (75) と C1F の (76) を比較されたい。

- (75) a. [For Jim to have hit the girl] was wise.  
 b. Jim was wise to have hit the girl.  
 c. ?\*[For the girl to have been hit by Jim] was wise.  
 d. ?\*[The girl was wise to have been hit by Jim].
- (76) a. \*[That the counselor ignored poor students] happened.  
 b. It happened [that the counselor ignored poor students].  
 c. The counselor happened to ignore poor students.  
 d. It happened [that poor students were ignored by the counselor].  
 e. Poor students happened to be ignored by the counselor.

C1F では受身文に It-replacement をかけることもできるのに, C1C では, 補文を受身にするだけで, すでに受け入れ難い文になってしまい, 当



然のことながら It-replacement 適用後も不自然な文のままである。序でながら (76)a は, non-emotive predicate を使用する C1F では Extraposition が義務的であることを示している。

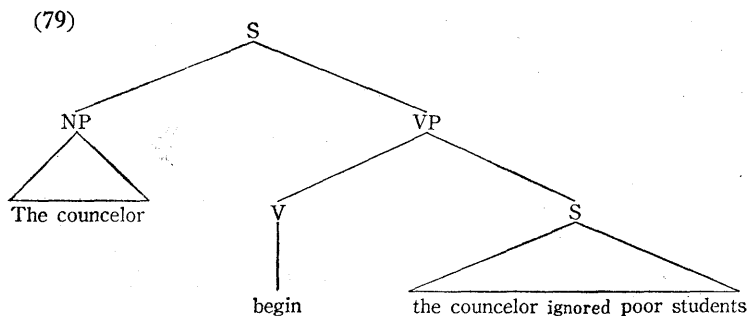
## 6. Temporal Predicate 類

C1 に加えるべき最後のグループ (C1G) として, (77) のような時間的な表現を行う述語を用いる (78) のような文を含むものとする。

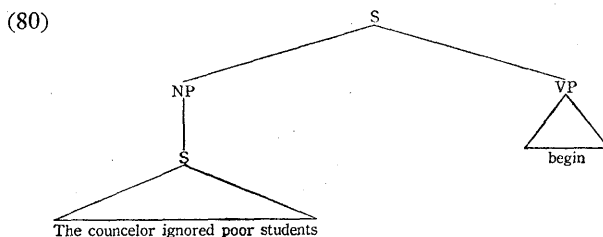
(77) Temporal predicates: begin, start, commence, recommence, continue, cease; keep (on), go on,...

- (78) a. The counselor began to ignore poor students.  
 b. The industries continued to grow for a while.

Rosenbaum (1967) は (77) のような動詞は Intransitive VP 補文をとるグループの中に入れ, (78)a の深層構造は次のようであると考えた。



しかしながら本稿では, 深層構造に於て補文は主語 NP に支配されていると仮定し, (78)a は次のようであったと考える。



Rosenbaum のような分析では, 次あげる (81) a, b. は, それぞれ別

の主語を深層構造では持っていることになり、同義性が説明されないが、(80)の分析だと、It-replacement が適用される補文内に passive 変形が適用されたと考えれば、(81) a. b は同一の深層構造から派生することができ、その同義性が説明できる。

- (81) a. The counselor began to ignore poor students.  
 b. Poor students began to be ignored by the counselor.

(81)a.b.の結果だけ見ると、(76)で示した C1F の文と区別できないことになるが、(82)でわかるように、temporal predicate をとる C1G の文は表層構造では、文主語そのままでも、Extrapolation を適用しても、どちらも非文法的であるので区別が可能である。

- (82) \*[That the counselor ignored poor students] began.  
 \*It began [that the counselor ignored poor students].

Kajita (1968) や Perlmutter (1970) が C1G のような文の補文は主語にあることを指摘したのであるが、次のようなものは確実な証拠であると思われる。まず、(83)a.b.c を比較されたい。

- (83) a. The industries continued to grow for a while.  
 b. *The growth of the industries* continued for a while.  
 c. *The industries* suddenly began to grow, and it continued for a while. (Kajita, 1968, p. 32-34)

b は、'continue' が自動詞であることを示しており、c は、'it' のさすところが 'the industries' と 'to grow' の部分だけであることを示している。

また、次の (84)a の文主語の部分を there 構文に変えたものが (84)b であり、a と b の同義性を説明するには、深層構造での主語も同一であったと考えなければならない。

- (84) a. More discontent began to be among the members.  
 b. There began to be more discontent among the members.  
 (Kajita, 1968, p.37)

これは、(81)と同様に、Rosenbaum 流の分析を捨てて、(80)の妥当性を確かめる証拠としては、かなり強力であると思われる。

以上は Kajita のあげている証拠であるが、もう一つ、Perlmutter (1970,

p. 110) のあげている証拠は次のようなものである。

- (85) a. Recourse began to be had to illegal methods.  
b. Heed began to be paid to urban problems.

(85) a では 'have recourse to', (85) b では 'pay heed to' というイディオムを使用していることは意味的に明らかであるから、深層構造では、'recourse' と 'heed' が単独で主語であった筈はない。'begin' を除いた部分が全体で文主語であり、Passive変形の後で It-replacement が適用されたと考えた場合のみ (85) a, b の文法性とイディオム解釈の正当性が説明できる。<sup>43</sup>

以上で、(78) のような文が C1G に属しうることを証明できたことになるが、temporal predicate は次のように ing 形を従えることもできる。

- (86) a. He began polishing the yoyo.  
b. John continued going to college.

ただし、主動詞が進行形になる時には Emonds (1974, p.116) の Double ing surface constraint により、(87)a のような ing 形が連続する文は派生を阻止され、b のように to 不定詞のみ可能である。

- (87) a. \*He is beginning polishing the yoyo.  
b. He is beginning to polish the yoyo.

(86) の ing 形が、普通の他動詞の目的語としてあらわれる動名詞とは性質が大きく異なることを Ross (1973) や Emonds (1974) らが指摘しているが、以下、Emonds の観察を紹介したい。

- (88) a. Going to college was  $\left\{ \begin{array}{l} *continued \\ considered \end{array} \right\}$  by John.  
b. *It's* going to college *that* John should  $\left\{ \begin{array}{l} *continue \\ consider \end{array} \right\}$  now.  
c. \*John continued *the study* and *driving too fast*.  
John considered *the marine corps* and *going to college*.  
d. \*The members *kept* visiting the prisoners *on* during the summer.  
The members *brought* visiting the prisoners *up* at every meeting.

temporal predicate を用いる文の ing 形は, passive も Cleft sentence formation も適用不可能であり, c のように普通名詞の目的語と並置できず, Particle movement も適用できないことがわかる。以上の観察から Emonds (1974, p.112) は, temporal predicate の補文は, 少なくとも表層構造に於ては NP ではないという判断を下している。

しかし, もう一步突込んで (88) を検討してみたい。まず, (88)a のもととなっている文は次のようであったはずである。

- (89) a. John continued going to college.  
b. John considered going to college.

ここで(89)bの 'consider' は, Thompson (1973, p.382) も指摘しているように verbal gerund をとれる動詞で, (88) a.b.c からわかるように明らかに Explicit control される動名詞を従えることのできる他動詞であるのに対し, (89) a の temporal predicate のうしろの句は (88) のテストから明らかないように目的語句ではありえず, しかも, 主語によって選択制限を受けているという点で, (86) のような文は, (78) のように to 不定詞を従える文と, 全く同一の構造を持っていると考えることができる。つまり, (86) も, (80) のような文主語と自動詞からなる C1G の例であるといつてよい。実際, temporal predicate をとる文は, 意味を変えずに次のように言い換えることができるのである。<sup>14</sup>

- (90) a. He began to work.  
b. He began working.  
c. His working began.

ただし, (90) a.b. のように to 不定詞と ing 形の交代が常に自由であるわけではなく, 次のような場合, to 不定詞を使う方が普通である。

- (91) ?He began understanding how it was done.  
?The baby began feeling hungry.

このように, 補文が運動を表わさない時や主語に意志の働かない時などは, ing 形は普通, 使用されないといわれているが, (87)a の Double ing とあわせて, temporal predicate の補文に対する共通な, なんらかの制約

---

があるものと思われるが、具体的な形は、現在のところ不明である。

さらに次の文中の *ing* 形に注意されたい。

(92) a. He began his polishing of the yoyo.

b. He was beginning his polishing of the yoyo.

(92) a の ‘polishing’ は、本稿の第2節で述べた nominal gerund の例であることは ‘of’ の存在から明らかであり、この場合、‘began’ は ‘his polishing of the yoyo’ という名詞句を目的語とする他動詞であって、(92) a の文は C1G の例とはならない。(92) b も同様に nominal gerund を目的語としており、C1G の例ではなく、(87) a のように Double *ing* surface constraint によって派生を阻止されることはない。

(92)a, b と異なって (86) a の ‘polishing’ は ‘the yoyo’ を直接従えており、verbal gerund であるといってよいであろう。ただし、この temporal predicate のあとにくる gerund は ‘his having polished the yoyo’ のようにはなりえないので、Thompson (1973) のいう verbal gerund の一種の fact gerund では勿論なく、また (88), (89) b の ‘consider’ の後にくるような activity gerund と異なるものであり、verbal gerund の中でも、一層名詞性が希薄であることがわかる。普通、この temporal predicate の後の gerund は、to 不定詞とも交代しうることから、“infinitive gerund” のような名称をつけて、さらに上述のような verbal gerund の中でも新たに下位分類した方がよいのではあるまいか。

一応、以上の考察より、(78) (86) のような文は C1G の例であることを確認したことにしたい。

(1975年8月20日)

## 註

(1) 第一部で仮定したことは、特別変更しない限り、第二部にもそのまま適用されるものとする。例えば conjunction (重文構造) と relativisation (関係詞節構造) に関する考察は本稿では除外し、いわゆる complementation (補文構造) のみ、本稿の対象とするという限定も、その内に入る。なお、第一部の4で述べたように、副詞表現の考察も除外してゆく。ただし、ここでいう副詞表現というのは VP に支配されていないものであり、VP に支配されているもので、従来、副詞句と考えられてきたものに関しては、この限りではない。例えば、S6 の PP, S8 の PP, S9 の PP など。

(2) 安井 稔 (1974 b, p.11) は「文型に関する記述を、いわば、二段構えにして、単文の文型、複文の文型というように分割し、複文の文型は、できるだけ、単文の文型に基づいて行なつてゆくという方式は、おそらく、記述を簡潔にし、全体に対するよりよい見通しを与えるという点でも好ましいことになるであろうと思われるからである。」と述べているが、この案を私は二年前から実行してきており、同じ考えであることがわかった。

1974年1月、ICU 大学院に提出した修士論文も、これを実行した最初の試みであるが、今回、発表するものは、大幅に改訂してある。文主語の分類も、4種類だけであったが、本稿では7種類になっている。

(3) Chomsky (1972, p.134) は次のように述べている。

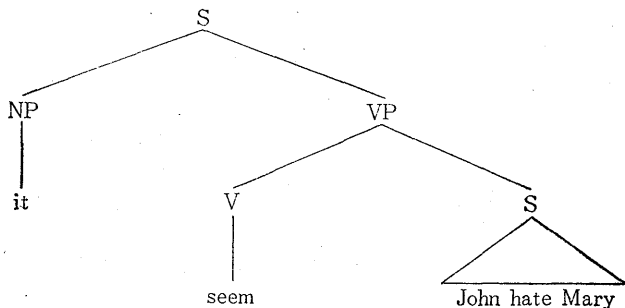
“semantic interpretation is held to be determined by the pair (deep structure, surface structure) of  $\Sigma$ , rather than by the deep structure alone; further, it is proposed that insofar as grammatical relations play a role in determining meaning, it is the grammatical relations of the deep structure that are relevant (as before), but that such matters as scope of “logical elements” and quantifiers, coreference, focus and certain kinds of presupposition, and certain other properties, are determined by rules that take surface structure (more precisely, phonetically interpreted surface structure) into account.” (イタリック体は筆者による。)

本稿は、第一部で仮定したように、今、引用したような拡大標準理論に拠っているので、「前提」も直接、深層構造で表示する必要はないと考えている。

(4) VP は拡張していかない。ということは、他動詞、自動詞、形容詞などのあらゆる述語を含みうる述部であるということである。本稿では VP の内部構造は直接、問題にはならず、主語 NP に支配される S との関連に於て議論が展開されていくことになる。

序でながら、昨年発表した第一部の深層文型一覧表中、C1 については、構造図式、例文ともに本稿で提示するように改訂したい。つまり、NP に支配される DET と N は削り、下位分類は4種類から7種類に増加したことになる。

(5) Kajita (1968) は、(14) のような例を彼の group 3 (e.g., certain, likely, chance, sure, happen.) と Group 4 (e.g., appear, seem, prove, turn out) を区別するために利用している。彼の分析では、Group 4 の補文は次に示すように、VP の下に生成される。



もし、この分析が正しいならば、彼の Group 4 の動詞類は、私の分類では、C5 で扱うべきであろうが、(4)や(14) のような例が marginal である可能性もあるので、本稿では Kajita のような分析は採用しなかった。

(6) 本稿では(9) のような深層構造を仮定したために、Extrapolation の操作によって expletive It が主語の位置に導入され、その後 It-replacement で補文の主語が移動されて、主文の expletive It の位置にくると仮定している。従って名詞句補文を NP→it S と開く場合の Extrapolation, It-replacement とは多少、操作が異なることに注意。

(7) Jackendoff (1972, p. 106) は、(26) のような挿入節は(27) から派生されるのではなく、Sに直接支配される文末のS (つまり副詞節) から派生されると考えていて、次のような PS rule を提案している。

$$S \rightarrow NP - Aux - VP - \left( \begin{array}{c} \{Adv\} \\ \{PP\} \\ \{S\} \end{array} \right)$$

決定的な証拠に欠けるため、いずれの説が正しいかは不明であるが、本稿では一応 Emonds の立場を採用した。たとえ Jackendoff の分析が正しいとしても、C1B に使用する述語のみが挿入節を作りうるという点に於て、本稿での区別のためのテストには使用できるわけである。

(8) Chomsky (1970) は、(29) の 'drawing' を mixed form, (30) の 'drawing' を gerundive nominal と呼び、mixed form は恐らく変形体というよりも、むしろ基底部の規則で直接生成されると考えている。つまり Wasow and Roeper と同じ考え方であるといってよい。

(9) 'Trapping muskrats bothers Mary.' のような例も ambiguous であって、次の a, b を続けることができる。

- a. ...she thinks it's not feminine.  
 b. ...she is circulating a petition to make it illegal.

この場合はしかし、どちらの解釈とも verbal gerund であって、ただ 'trapping' が a の場合には Mary によって control されているのに対し、b の場合には control されていないという相違があるだけで、どちらも C1A の例となる。gerund の controller に関しては詳しくは Thompson (1973) を参照されたい。

(10) ただし、次のように二つの for NP が表層構造に於ても同一指示的 NP をとりうる場合がある。

For *Mary* to teach that course would be good for *her*.

しかし、普通は、このような場合には一方の for NP は Equi NP deletion をうける。Berman (1973, p.42, note 6) は、'easy' などは二つの for NP の同一指示性が要求されている述語で、表層構造では多くの人が一つの for NP しか出現を許さないと述べているが、Lasnik and Fiengo (1974, p.561) には次のような例もあり、個人差があるようである。

It is easy for students for them to be spoonfed knowledge.

(11) より正確に言えば、Kiparsky 夫妻のいう emotive predicate というのは、私が Double-for predicate と名付けたものもいっしょに含んでいるのであって、(68) にあげた emotive predicate は、Kiparsky 夫妻の emotive predicate の一部だけということになる。

(12) likely などは人によって for-to の形をとることもある。

[For John to blab] is likely,

It is likely [for John to blab]. (Burt, 1971, p. 167)

(13) Perlmutter (1970) は、(78)a のような文は、'begin' が自動詞にも他動詞にも分析できるが、主語が無生物である時には自動詞の分析のみ可能であるという観察をしている。しかし、本稿では、(80)の正当性を支持する議論のみ利用したので、他動詞の begin については、ふれる必要はない。

序でながら、Stockwell, Schachter and Partee (1973, chapter 8) は、この Perlmutter の自動詞説は認めるが、他動詞説は認めていない。その反論の根拠として、

(84)(k) John tries to be difficult to please.

をあげているが、本稿でも指摘した通り、Tough-movement の存在が疑わしい現在、これは、正当な反論には使用できないものと言ってよい。

(14) 「begin to do は動作の開始点に注意を払い、begin doing は開始された動作の継続に注意を払う」(研究社『新英和中辞典・第3版』)というような説明がよく行われるが、確かに、次のように、

- a. He started speaking and kept on for more than an hour.  
 b. He started to speak but stopped because she objected.



---

(Quirk, Greenbaum, Leech and Svartvik, 1972, p. 835)

文脈によって使いわけることもあるが、これは恐らく、私の考えでは、ing 形を使うことによって進行相が話者の頭に浮かぶからではないかと思われる。(90)のように単独で現われる場合、普通は、そのような区別は native speaker にも認識されてはいないようだ。

参 考 文 献 (第二部で使用したもののみ)

- Akamajian, A. (1972), "Getting tough," in *Linguistic Inquiry*, 3, pp. 373-377.
- Berman, A. (1973), "A constraint on tough-movement," in *Papers from the 9th Regional Meeting*, Chicago Linguistic Society, pp. 34-43.
- Burt, M.K. (1971), *From Deep to Surface Structure: An Introduction to Transformational Syntax*. New York: Harper and Row.
- Chomsky, N. (1970), "Remarks on nominalization," in Jacobs and Rosenbaum (eds.), *Readings in English Transformational Grammar*, pp. 184-221.
- , (1972), "Some empirical issues in the theory of transformational grammar," in Chomsky, *Studies on Semantics in Generative Grammar*. The Hague: Mouton, pp. 120-199.
- , (1973), "Conditions on transformations," in Anderson, S.R. and Kiparsky, P. (eds.), *A Festschrift for Morris Halle*. New York: Holt, Rinehart and Winston. pp. 232-286.
- Cushing, S. (1972). "The semantics of sentence pronominalization," in *Foundations of Language*, 9, pp. 186-208.
- Emonds, J.E. (1970), "Root and structure-preserving transformation." Unpublished Ph. D dissertation, M.I.T.
- , (1974), "Alternatives to global constraints," in 安井 稔編「海外英語学論叢 1974」英潮社. pp. 109-138.
- Hornby, A.S. (1956), *A Guide to Patterns and Usage in English*. 研究社。
- Jackendoff, R. S. (1972), *Semantic Interpretation in Generative Grammar*. Cambridge, Mass.: M.I.T. Press.
- Kajita, M. (1968), *A Generative-Transformational Study of Semi-Auxiliaries in Present-day American English*. 三省堂。
- Kiparsky, P. and C. Kiparsky (1971), "Fact," in Steinberg, D.D. and L.A. Jakobovits (eds.), *Semantics: An Interdisciplinary Reader in Philosophy, Linguistics, Anthropology and Psychology*. London: Cambridge Univ. Press.
- Lasnik, H. and R. Fiengo (1974), "Complement Object Deletion," in *Linguistic Inquiry*, 5, pp. 535-571.

- Lees, R.B. (1960), *The Grammar of English Nominalizations*. The Hague: Mouton.
- Perlmutter, D.M. (1970), "The two verbs *begin*," in Jacobs and Rosenbaum (eds.), pp. 107-119.
- Postal, P.M. and J.R. Ross (1971), "Tough movement *si*, tough deletion *no*!" in *Linguistic Inquiry*, 2, pp.544-546.
- Rosenbaum, P.S. (1967) *The Grammar of English Predicate Complement Constructions*. Cambridge, Mass.: M.I.T. Press.
- Ross, J.R. (1972), "Doubl-ing," in Kimball, J.P. (ed.), *Syntax and Semantics*, 1. 大修館. pp. 157-186.
- Shiseki, Y. (1975), "It-replacement and tough-movement," in *Attempts in Linguistics and Literature*. Tokyo: The Students in English Teaching, Graduate School of Education, ICU, pp.42-50.
- Stockwell, R.P., P. Schachter and B.H. Partee (eds.) (1968), "Integration of transformational theories on English syntax." Reproduced by National Technical Information Service. Revised version (1973), *The Major Syntactic Structures of English*. New York: Holt, Rinehart and Winston.
- Thompson, S.A. (1973), "On subjectless gerunds in English," in *Foundations of Language*, 9, pp. 374-383.
- Quirk, R., S. Greenbaum, G. Leech and J. Svartvik (1972), *A Grammar of Contemporary English*. London: Longmans.
- Wasow, T. and T. Roeper (1972), "On the subject of gerunds," in *Foundations of Language*, 8 pp. 44-61.
- Wilkinson, R. (1974), "Factive complements and action complements," in 安井 稔編. pp.52-81.
- 安井 稔編(1974 a)「海外英語学論叢 1974」英潮社。
- , (1974b) "英語文型論" in 「英語学第12号」開拓社。pp.2-20.